

歴史小説作家による子どものための タイム・ファンタジー

～ヒルダ・ルイスの『とぶ船』～

白 須 康 子

はじめに

ヒルダ・ルイス（Hilda Lewis, 1896～1974）は1930年代から70年代にかけて活躍した、主に大人向けの歴史小説作家として知られているが、児童文学の世界では彼女が初めて子ども読者を対象に書き、1939年に出版された *The Ship That Flew*（『とぶ船』）が古典の地位を確立することによって、その名をイギリス児童文学史に留めている女流作家である。この作品はそれに先立つこと33年前の1906年にE. ネズビット（1858～1924）が発表した *The Story of the Amulet*（『魔よけ物語』）の影響を非常に色濃く受けている。どちらの物語でも十歳前後の四人の兄弟姉妹が主人公として登場し、彼等が手に入れた魔法のアイテムを使って、時空を超えた歴史上の過去の国々への旅を体験するというタイム・ファンタジーである。本稿ではこれら二つの作品を比較するための前段階として、大人向けの歴史小説作家および児童文学作家という二つの顔を持つヒルダ・ルイスの作品群を概観し、彼女が書いた唯一のファンタジー作品『とぶ船』のイギリス児童文学史における位置づけを確認する。なお、この作品は1953年に石井桃子によって岩波少年文庫の一冊とし

て邦訳され、日本ではそれ以来ずっと途絶えることなく読み継がれてきたが、オリジナルの英語版はイギリスにおいて長い間絶版となっていた。しかし、1993年に新版が出た後、1998年に Oxford Children's Modern Classics シリーズの一冊として再版され、ようやく現代の子どもたちにも親しまれるようになったという経緯がある。

歴史小説作家ヒルダ・ルイス

ヒルダ・ルイスの生い立ちや、その後の詳しい経歴についてはほとんど知られていないが、Waters (1999, pp. 647-48) と Commire (1980, p. 105)、および石井桃子がハードカバー版『とぶ船』(1973, pp. 349-50)で「訳者のことば」として原作者について紹介している文章を参考にしてまとめてみると次のようになる。ヒルダ・ルイスは1896年にロンドンで生まれ、イギリスの著名な教育学者マイケル・ルイス博士と結婚し、一人息子のハンフリーがいる。ロンドンで数年教職に携わった後、夫が大学の教授をしていたノッティンガムの町で小説家として人生の大半を過ごし、1974年に亡くなった。

このようにヒルダ・ルイスは教育者としてスタートするが、30歳代後半から歴史小説を書き始め、イギリスを代表する歴史小説作家の一人となる。特にメアリー女王について非常に綿密な資料収集を行うことによって執筆した晩年の三部作、*I Am Mary Tudor* (1971)、*Mary the Queen* (1973)、および *Bloody Mary* (1974) でよく知られている。大人向けの出版物は1933年に発表された二冊の処女作 *Pegasus Yoked* と *Madam Gold* を皮切りに1970年代後半、著者の死後に出版された遺作二点を含めて全部で28冊に及ぶ。その中には *The Day is Ours* (1947) のように聴覚に障害を負って生まれた一人の少女が、その障害を克服し

て成長し、やがて結婚して健康な子どもを産むまでの半生を描いた女性の一代記のような作品も含まれている。この作品では主人公の Tamsie が子ども時代に耳が聞こえないことで癩癰を起したり、話すことを習うために両親によって寄宿学校へ送られることに納得のいかない気持ちなど、細やかな子どもの心理描写が大変印象に残る。

また、ヒルダ・ルイスの作品のほとんどを占める歴史小説は細部にまで細心の注意が行き届いており、その時代の雰囲気をあますところなく再現している (Waters, 1999, p. 648)。しかし、彼女の書いた歴史小説は現在そのほとんどが絶版となっており、入手可能なものは *I, Jacqueline* (2008)、*Wife to Charles II* (2006) と *Harlot Queen* (2006) の三冊のみである。いずれもヨーロッパの王侯貴族に嫁いだ女性を主人公とした史実に忠実な歴史小説でありながら、ヒルダ・ルイス自身の想像力を駆使した独自のリアリティーを持った作品である。*I, Jacqueline* の主人公ジャクリーンは 15 世紀オランダのウィリアム 6 世の娘で、彼女の波乱万丈の物語はオランダ、イギリス、フランスの宮廷を舞台に繰り広げられる。*Wife to Charles II* は 17 世紀イギリスのチャールズ 2 世に嫁いだポルトガルの王女キャサリンのたどった苦難と静かな勝利を描き、一方 *Harlot Queen* では 14 世紀にイギリスのエドワード 2 世と結婚したフランス人の女王イザベラを主人公に、彼女を欺いた夫に対する執拗な復讐劇を仕立てあげている。どの作品にも最後に参考文献として、これらの小説を書くのに参照した様々な歴史に関する書物が 20 冊以上掲載されている。このことからヒルダ・ルイスがいかに丹念に書物として残されている資料を読み込み、その解釈の上に時代背景という大きな枠組みはもちろんのこと、調度品や衣服、装飾品、飲食物のような細部にもこだわりつつ、彼女の小説に登場する人物を造形していったかがうかがえる。

児童文学作家ヒルダ・ルイス

ヒルダ・ルイスが教育者から作家に転向したのは37歳の時で、その後78歳で亡くなるまで生涯小説を書き続けたが、その約40年にわたる創作活動の中で子ども読者を対象に書いた児童文学作品は *The Ship That Flew* (1939)、*The Gentle Falcon* (1952)、*Here Comes Harry* (1960)、*Harold Was My King* (1968) の4点である。そのうち現在入手可能なものは第一作目のみで、あとはすべて絶版となっている。ヒルダ・ルイスがそもそも児童文学という新しい領域に第一歩を踏み出すことになった経緯について、彼女の息子ハンフリー・ルイスが1993年に再版された *The Ship That Flew* の序文で次のように述べている。ヨーロッパにはすでに戦争の暗雲が垂れこめていた1937年の夏、当時7歳だったハンフリーは両親とともにノルマンディーへ休暇に出かけたが、休み中に読む本を持っていくのを忘れてしまった。そこで、すでに作家としての道を歩み始めてはいたが、まだ子ども向けの本は一冊も執筆したことのない母親のヒルダ・ルイスが息子のために、この本を書き始めたのである。このようにして、イギリスで例えばルイス・キャロルの *Alice's Adventures in Wonderland* (1865) やビアトリクス・ポターの *The Tale of Peter Rabbit* (1902) といった不朽の名作が生まれる契機となったのが、作者の身近にいる子どもたちを楽しませてあげたいという作り手の側の熱意と優しい思いであったのと同じように、ヒルダ・ルイスの『とぶ船』も母親の子どもに対する深い愛情が原動力となって生まれた作品である。しかし、他の三作品が書かれた年を追ってみると、第二作目以降は息子のハンフリーのために書いたのではなさそうである。*The Ship That Flew* が出版された時、ヒルダ・ルイスは43歳、息子は

9歳である。その後十年以上のブランクがあり、*The Gentle Falcon* を発表したときのヒルダ・ルイスの年齢は56歳なので、息子はすでに22歳になっている。残り二作はそれぞれ母親が63歳で息子が30歳、母親が72歳で息子が38歳の時の作品である。1993年の時点でハンフリー・ルイスにはすでに『とぶ船』が書かれた頃の彼自身の年齢に近い二人の孫がいると先ほどの序文で述べているので、*Here Comes Harry* と *Harold Was My King* の中でヒルダ・ルイスが献辞をささげているダニエルとヘンリエッタは息子ハンフリーの子ども、すなわち彼女の孫たちなのではないかと推測できる。こうしてみると、ヒルダ・ルイスはその長い作家活動の中で主に大人向けの小説を書く傍ら、40歳代から70歳代にかけて十年に一冊のペースで子どものために書くことを常に忘れなかった作家であったことがわかる。

本稿で取り上げる *The Ship That Flew* はヒルダ・ルイスが得意とする歴史小説と、子ども読者を楽しませるためのファンタジーの手法を組み合わせた歴史ファンタジーであると同時に、過去の時代へ遡るタイム・トラベルの要素を併せ持つタイム・ファンタジーでもある。十歳前後の若い読者に向けてヒルダ・ルイスが書いたファンタジー系列の作品は『とぶ船』一冊だけで、残りの三冊はもう少し年齢の高いティーン・エイジャー向けの本格的な歴史小説となっている。第二作目の *The Gentle Falcon* (1952) は1377年に十歳でイギリス国王に即位したりチャード2世が1399年に32歳の若さで失脚して命を落とす三年前に、彼の二度目の妻としてフランス王家からイギリスに渡った幼い王女イザベラのたどった悲劇的な短い人生を、この幼い女王に結婚当初から約十年間仕えた同名の若い侍女イザベラ・クリントンの目を通して描いている。この本には Evelyn Gibbs が挿絵を描いており、目次に先立って Author's Note のページがある。そこにはヒルダ・ルイスの子ども読者

に対する教育的配慮がうかがえる次のような言葉が書かれている。

In many a chronicle and many a book you may read of Richard and Isabella and of all those who played a part in their story. And you may read of the people of England both gentle and simple – what they wore and what they ate and how they played; and how they prayed and how they lived and how they died. Here are a few chronicles and books. Some of them you will want to read now; others you will enjoy later.

(Lewis, 1952, p. vii)

これに続いて、彼女の大人向け歴史小説と同様、参考書としてシェークスピアの三つの劇、『リチャード2世』、『ヘンリー4世』、『ヘンリー5世』の他、年代記やこの物語の舞台となる14世紀のイングランド地方の人々の暮らしを絵で紹介した本など子どもにも楽しんで読める本から本格的な歴史的資料まで21冊の書物が列挙してある。また、この作品だけは特定の個人ではなく、ヒルダ・ルイスにこの本を書くようにと励ましてくれたノッティンガム大学の友人たちに対して感謝の気持ちを表明している。

第三作目の *Here Comes Harry* (1960) はヒルダ・ルイスが恐らくダニエルとヘンリエッタという二人の孫のために書いた最初の作品で、William Stobbs の挿絵がついている。この物語のハリーとは父親のヘンリー5世の後を継いで1422年に生後八か月で即位し、その二ヶ月後に名目上のフランス王も兼ねたヘンリー6世のことで、彼の子ども時代を扱っている。第二作目と同様、この作品もハリー王子と同じ名前を持つ十歳年上の金細工師見習い、ハリー・ラシュデンの視点から語られてい

る。幼くして国王となり、さまざまな政治的陰謀に巻き込まれることになるヘンリー6世の子ども時代の物語の中で、15世紀イギリスの宮廷の様子が生き生きと再現されている。この本では物語に先立って主人公である二人のハリーが生きていた当時のロンドンの大まかな地図と、著者による「序文」のページがある。その中でヒルダ・ルイスはヘンリー6世の両親であるヘンリー5世とフランス人のキャサリン女王、および主人公の二人のハリーを紹介し、ヘンリー6世が英仏両国の国王となった歴史的経緯を簡潔に説明している。また、この時代が百年戦争の真ただ中であつたことにも触れ、この物語に登場するイギリス、フランス両国の歴史的人物のリストも載っている。その次のページにはこの小説のタイトルの由来となつた *Historical Collections of a Citizen of London, in the Fifteenth Century* に収められているウィリアム・グレゴリーの『ロンドン年代記』からの引用が掲載されている。更に、この物語では最終章に引き続いて「あとがき」があり、ヘンリー6世に備わっていたと言われる霊的能力について簡単に触れ、作中でヘンリー6世はジャンヌ・ダルクに会うが実際にはそのような歴史的記録はないこと、しかし彼女の裁判の時に近くのルーアン城に滞在していたという事実を補足説明している。それに対し、最終章でヘンリー6世が初めて妻のマーガレットに会う場面は自分の創作ではなく、その当時に書かれた手紙に基づいていると述べている。そして他の作品と同様、五冊の子ども向け歴史書と三冊の年代記が手短な解説とともに推薦図書として挙げてある。また、最後の「謝辞」からヒルダ・ルイスは1954年に出版された大人向けの歴史小説 *Wife to Henry V* の一部をこの作品の中で使っていることがわかる。

ヒルダ・ルイスが執筆した最後の児童文学作品 *Harold Was My King* (1968) では時代をさらに遡って11世紀のイギリスを扱っている。エド

ワード懺悔王亡き後、イングランドのハロルドとノルマンディーのウィリアムがイギリス国王の座を争い、結局後者が征服王としてイギリスを支配することになるが、この物語は征服された側のハロルドに小姓として献身的に仕えたエドモンド少年を主人公として、彼の視点から語られている。この本には挿絵はなく、前作で献辞を捧げた二人のうちの一人、ダニエルに宛てた短い手紙形式の序文がある。その中でヒルダ・ルイスはウィリアム征服王の性格と行為を語るのに古い写本を参考にしたが、その写本の書き手がノルマン人であるか、イギリス人であるかによって同じ人物が全く違った観点から描かれていることに注意を促し、この物語はウィリアムの到来によってすべてを失うイギリス人の少年の目を通して語られるので、いくらか偏見があるけれども、彼は公平に自らの喪失の先にあるものを見ようとし、最終的に無情な征服王を理解するようになる」と書いている。この本にはヒルダ・ルイスの他の作品のように参考文献や推薦図書のリストはないが、ダニエルがいつか自分で古い年代記をひもといて自分なりの結論を下すことを望むと結んでいる。また、この作品でも「序文」で物語の歴史的背景の簡潔な説明があり、語り手が誰なのか明記されている。

以上三冊のヒルダ・ルイスによる子ども向け歴史小説を概観すると、いくつかの特徴があることがわかる。まず、子ども読者が物語の中の過去の世界に容易に入っていくことができるように、さまざまな工夫が凝らしてあるのが第一の特徴である。例えば、舞台になっているそれぞれの時代の背景説明や歴史的人物の紹介を加え、読者の年齢に近い子どもを語り手として設定することで、彼等が語り手と一体化しながら物語の時代を体験できるようになっている点である。二つ目は子どもたちがヒルダ・ルイスの作品を読んだ後で興味を持ったり、疑問を感じた事柄について自発的に詳しく調べることができるように、またさまざまな解釈

が可能な歴史上の人物や事件について、自分なりの結論を導き出すための手掛かりとなる歴史的な文献や歴史書、参考書を予め提示しておくという教育的配慮である。三つ目の特徴は語り手の子どもたち、イザベラ・クリントン、ハリー・ラシュデン、エドモンドは皆、戦いで父親や両親を失った貴族の娘や息子で、生まれながらの身分に不相応な貧しい暮らしを強いられながらも、運命的な出会いによって巡り合った歴史の波に翻弄される王家の人々、特にたとえ子どもであっても、その肩にのしかかる過重な使命や責任のために急激な成長を余儀なくされる幼い王や女王に寄り添って行動をともにしながら、自らも成長していく誠実な若者たちの姿を描いている点である。

次に、これら三点の児童文学作品をヒルダ・ルイスが書いた大人向けの小説と比較してみると、次のような共通点がある。まず、両者とも歴史的な資料に基づいて史実にできるだけ忠実に書かれており、しかも参考文献を列挙している点である。また、彼女が大人向けの歴史小説で繰り返し追求している男女間の人情の機微について、三冊の児童文学作品においても思春期にある登場人物の少年少女たちの揺れる心の動きを繊細な筆致で描いている。特に *The Gentle Falcon* では語り手のイザベラは13歳の時から侍女として五歳年下のフランス人の女王イザベラに仕え、リチャード2世が殺害された後も女主人が母国に帰って再婚するまで付き添った後、イギリス人の幼馴染とフランスで結婚してイギリスへ戻り、今では四人の子どもの母親になっている女性として、将来夫となる Gilles と結婚するまでに経験した若き日の様々な心の葛藤を鮮明に回想している。この幸福な一組のカップルとは対照的に、フランスの王女イザベラは8歳で両親のもとを離れ、二十歳も年上のイギリス国王リチャード2世の妻となるが、12歳の時にはすでに未亡人となる。このたった数年の間に彼女は女性として心理的に急速な成長を遂げる。王をは

じめ周囲の者たちは皆いつまでも子ども扱いするが、この幼い女王は窮地に立たされている王を心から愛し、妻として何とか心の支えになりたいと真に願うが、その甲斐もなく夫は殺害され、彼女もまた囚われの身となる。ようやく 16 歳の時に帰国が許されるが、心は亡き夫とともにあり再婚の話を断り続ける。しかし、それは許されず翌年彼女の従兄弟にあたる年下の青年との結婚が取りきめられて心ならずも結婚式の当日を迎える。その式の最中の小さな美しい出来事をヒルダ・ルイスは侍女のイザベラに目撃させている。光の悪戯で花嫁はふと花婿がかつてイギリスの女王であり、しかも年上の女性と結婚することに恐れおののいているということに気付き、小さなジェスチャーで年下の花婿を慰めたのである。こうしてオルレアン公爵夫人となったイザベラは静かな愛に目覚めるが、不幸にも 21 歳の若さでこの世を去る。彼女の短い生涯の中にも、その紋章であるハヤブサ的な非常に強烈な感情の発露と、それとは対照的な穏やかな愛の姿が描かれている。*Here Comes Harry* の最終章におけるヘンリー 6 世と妻マーガレットの出会いのシーンでもヒルダ・ルイスは生まれた時から真に心を許すことのできない環境で育ってきた王が、金細工師見習いのハリー・ラシュデンを従えてお忍びでまだ見たことのない妻のもとを訪れ、初対面のマーガレットと身分を隠して言葉のやり取りをするうちに、お互いの本質を理解して二人が心を通わせる瞬間を見事に物語っている。

タイム・ファンタジー『とぶ船』

すでに述べたように *The Ship That Flew* (1939、『とぶ船』) はヒルダ・ルイスが 41 歳の時に息子ハンフリーに語り聞かせることが契機となって生まれ、ネズビットの *The Story of the Amulet* (1906、『魔よけ

物語』)との類似点が見られる作品である。1896年生まれのホテル・ルイスはネズビットの作品が出版された当時十歳であることから、おそらく彼女は子ども時代にこの本を読んで楽しんだ経験を持っているのではないと思われる。それゆえ成人して自ら子どものために何か面白い物語を書かなければならないという必要に迫られた時に、そのモデルとしてとっさに思い浮かべたのがかつての愛読書だったとしても不思議ではない。これら二作品の最も顕著な類似点は十歳前後の男の子二人、女の子二人という四人の兄弟姉妹を主人公として登場させている点である。もっともネズビットの場合ロバート、アンシア、シリル、ジェインの四人組の設定は *Five Children and It* (1902、『砂の妖精』)に遡り、その続編 *The Phoenix and the Carpet* (1904、『火の鳥と魔法のじゅうたん』)でも活躍する。『とお船』では1930年代当時の現代の子どもたち、グラント家の四人兄弟ピーター、シーラ、ハンフリー、サンディーが主人公である。彼等の中でも魔法の船を手に入れる長男のピーターが最も重要な登場人物であるが、次男の名前としてホテル・ルイスは自分の一人息子ハンフリーを実名で登場させ、彼が実際にはいない兄や姉妹と一緒に物語の中で冒険を楽しめるようにしているばかりでなく、物語の随所でハンフリーに活躍する機会を与えているのである。更に、大人の登場人物に関しても両親あるいは片親の不在、子どもたちを温かく見守る老賢人や女中の存在といった共通点が見られる。

第二の類似点は魔法のアイテムの存在である。ネズビットの作品中の子どもたちは古いお守りの片割れを、ホテル・ルイスの主人公たちは古い船の模型を、どちらも骨董品屋で見つける。これら魔法の力を秘めた小物が主人公の子どもたちをファンタジーの世界へと誘う入口となる。お守りは暗闇、不思議な声や光といったネズビットらしいドラマチックな効果を発揮して、子どもたちの唱える呪文や命令とともに大きなアー

チとなり、それをくぐり抜けることによって主人公たちは一瞬にして異界の住人となる。ピーターの船も元の大きさは全長 15 センチほどの小型のおもちゃであるが、彼が行きたいと望む場所や歴史上の時代を声に出して告げると、その小さな船が乗組員の数に合わせて大きくなる。しかし、船に乗っただけでは目的地にたどり着くことはできない。この船はすぐ隣の町に空間移動する時も、何世紀も昔へと時の流れを遡る旅をする時も、飛行船のように空を飛び、目的地までの距離や現在との時間的隔たりの度合に応じて、時間をかけてその行先へ到着する。そして、タイム・トラベルの場合には現代と過去の時代を隔てている歴史の黒い雲の中を突き抜けなければならない。どの位時を遡るかによって、船がその黒雲の中で静止している時間が長かったり短かったりする。このような点にヒルダ・ルイスの歴史小説作家としての視点がうかがえる。そして彼女は、ピーターたち四人を魔法の船に乗せ母国イギリスの過去のみならず古代エジプトや北欧神話の神々の住居、アースガルドへと旅をさせ、オーディンやフレイといった有名な神々、それぞれの時代に生きていた歴史的人物や無名の人々との交流を通して、子どもたちに過去をどこか遠くにある自分には何の関係もないものとしてではなく、生きている歴史として体験させるのである。

この物語では子どもたちが魔法の船の使い方を試行錯誤しながら次第に学習して、ようやく自分たちが望む過去の時代へどこへでも自由に旅をすることができるようになるという展開の仕方をするため、彼等は最初のうち同じ時代の空間移動で満足している。そのため歴史ファンタジーの様相を呈してくるのは、子どもたちが神々の都アースガルドを訪れて魔法の船の正当な持ち主であるフレイから Skidbladnir と呼ばれるその船の秘密を教えてもらった後の章からである。クラウチは『とぶ船』の初めの数章には時のテーマをどのくらい真剣に捉えるかについての迷

いがある (Crouch, 1972, p.22) と指摘している。初めの数章とは上記の如く主人公たちが手に入れたばかりの魔法の船に乗って Radcliff の町や、療養所に入院している母親に会いに行ったり、現在のエジプトへ海外旅行に出かける冒険を扱っている章のことを指していると思われるが、果たしてこれらの章がヒルダ・ルイスの迷いを表しているだろうか。もし私達が本当に魔法の船を手に入れたとすれば、まずはその船に乗ってどこか「別の場所」へ行ってみたいと思うのが普通で、初めから「別の時代」への旅を思いつくだろうか。グラント家の四人兄弟は学習能力のある賢明な子どもたちで、前回の旅で犯した失敗から学んだ教訓を必ず次の旅に生かすことができる。空間移動の旅で魔法の船の扱い方や異国での振舞い方に関するスキルをマスターした後で、それなら「別の時代」へも行けるだろうかとシーラが言い出すのは自然な成り行きである。それゆえ冒頭の数章は主人公たちが (感情移入して読んでいる読者にとっても) 入手したばかりの魔法の船に馴染むまでに必要な過程であり、そこで危ない思いをした経験がタイム・トラベルの際に彼等に慎重で分別のある行動を取らせるわけであるから、これらの章があることで時のテーマの重要性が損なわれるというよりむしろ、ごく自然に物語後半の歴史およびタイム・ファンタジーへの橋渡しをしているように思われる。

ヒルダ・ルイスがこの作品の中で扱っている時代はノルマン征服直後の 11 世紀イングランドと、彼女が人生の後半を過ごし、息子のハンフリーにとっては生まれ故郷であるノッティンガムのシャーウッドの森を根城に活躍した中世イギリスの伝説的英雄ロビン・フッドが生きていたとされる 12 世紀のイングランド、およびアメンエムヘト 1 世 (紀元前 1962 年没) 時代の古代エジプトである。彼女は『とぶ船』から約 30 年後に出版された *Harold Was My King* (1968) の中でも 1066 年の「ノルマン人の征服」という歴史的事件を扱っていることから、ブリテン島の

土着の民族サクソン人が大陸からやってきた北欧系の民族に支配されるようになり、両者が混じりあうことによって今日のイギリスという国の基礎が築かれた、この時代に歴史小説作家として特に興味を抱いていることがわかる。そして、ピーターたちが時を遡ってこの時代を訪れた時に、自分たちをどちらの民族とするか選択する場面で、四人とも迷わず敢えて危険な目に合う確率の高い被征服民族であるサクソン人を選ぶことから、ヒルダ・ルイス自身もサクソン族の方に親近感を持っているようである。ロビン・フッドの時代の選択は息子ハンフリーのために郷土色のある、しかもイギリス人の子どもならだれでも知っているヒーローを登場させて喜ばせてあげようという母親のサービス精神の表れであろうし、古代エジプトへのタイム・トラベルは明らかにネズビットの作品からの影響で、『とぶ船』に時間的な拡がりどエキゾチックな趣を添えている。

征服王とともにノルマンディーからイギリスへ渡ってきた貴族の娘マチルダと、アメンエムヘト1世の王子ウスレトセン（彼の実名は Senusret または Sesostriis であるが *The Ship That Flew* (1998) の中では Usertsen と綴られている）は四人の主人公たちと同年代の子どもであるが、前者は城主である父親が、妻に先立たれているために彼の娘として女主人の役を務める少女であり、後者はファラオの息子として父親が遠征中にその代理で王国の統治を任されている少年である。彼等と友情を築くことで四人の兄弟姉妹は、過去の時代の文化やものの考え方に触れて心を豊かにし、最終的に成長して、もはや魔法を信じない大人になっていくが、ヒルダ・ルイスはそれを何ら悲しむべきことではなく、人間の成長過程の一部として描いている。しかし、彼女は物語の最後に子どもたちへプレゼントを授けることを忘れない。ピーターが約束通り魔法の船をフレイに返すことで神々の王オーディンは四人の子どもたち

それぞれに「心からの望み」をかなえてくれるのである。ここにもネズビットの『魔よけ物語』との類似点がある。アンシア達は両親と弟が無事家に帰ってきてほしいという「心からの望み」を持っているが、その願いは物語の最後でかなえられてハッピー・エンドを迎える。一方、オーディンがかなえてくれる「心からの望み」はネズビットの場合のように明確な形を取らず、主人公たちも自分たちの願いが即座にかなえられたという自覚はない。しかし、物語の結末でピーターは成人して人気作家になり、シーラは優れた医者になり、ハンフリーは憧れの考古学者になり、末っ子のサンディーもやはり望み通り結婚してたくさんの子どもの母親となったことが語られる。しかも、成人したこの四人兄弟を知っている人々が彼等のことを「幸運なグラント兄弟」と呼ぶことから、四人の「心からの望み」はそれぞれ将来のライフワークという形に結実してかなえられたことになる。ここにヒルダ・ルイスの子ども読者を対象とした歴史小説に一貫してみられた成長物語という共通のテーマを見出すことができる。

『とぶ船』のイギリス児童文学史における位置づけ

The Ship That Flew が出版された 1939 年は第二次世界大戦が始まった年であるが、イギリス文学史上では第一次世界大戦が終結した 1918 年から 39 年までの約二十年間はファンタジーを中心に優れた作品が数多く書かれた時期である。特に 1930 年代は「桃色の十年」と呼ばれ、マーカス・クラウチは『宝さがしの子どもたち』(1899) に始まるリアリズム系列のバスタブル家物語のシリーズや、『砂の妖精』(1902) に始まるファンタジー系列のサミアドが登場する物語のシリーズなどで近代児童文学における基本的な物語のパターンの原型を創り出した E. ネズ

ビットの伝統を真に受け継ぐ作品が現れたのがこの年代であるとしている (Crouch, 1972, p. 17)。

1930年代は休暇物語というリアリズムの新しいジャンルを生み出したアーサー・ランサムの『ツバメ号とアマゾン号』(1930)で幕を明け、ランサムはその後30年代を通してこのシリーズを書き続けた。ランサムの作品はネズビットと同様子どもを鋭く観察し、あるがままの子どもの姿を周囲の大人たちに見守られながらもほとんど大人が介入しない子ども中心の世界の中で描いている。1934年にはネズビットの確立した「エブリデイ・マジック」の流れをくむトラヴァースの<メアリー・ポピンズ>シリーズの第一巻目『風にのってきたメアリー・ポピンズ』が出版され、1937年にはやはりネズビットの影響を感じさせる喜劇的な主人公ビルボ・バギンズの登場するトールキンのハイ・ファンタジー『ホビットの冒険』が発表された。そして1939年には偶然にも歴史とタイム・トラベルのテーマを扱ったヒルダ・ルイスの『とぶ船』とアリスン・アトリーの『時の旅人』が出版された。前者は上記の作品群に見られるネズビットの伝統をすべて踏襲している。つまり、両親が不在または家にいてもほとんど物語には登場してこない家庭に、魔法の船が入り込んでくることによって4人の兄弟姉妹の時空を超えた旅が始まり、彼等のはらはらするような、時にはコミカルな冒険談の中で自然な子どもの姿が描かれている。

『とぶ船』への影響が強く感じられるネズビットの『魔よけ物語』(1906)は砂の妖精サミアドが登場する物語のシリーズ第三巻にあたり、子どもたちの日常生活の中に魔法が現れることで生ずるコメディであるが、シリーズ第二巻『火の鳥と魔法のじゅうたん』(1904)で始まった4人の子どもたちが絨毯に乗って次々と好きな場所を訪れる空間移動の旅から一歩進んで、歴史上の過去の国々へ旅をするタイム・トラベル

のテーマが初めて児童文学の中に導入された作品である。ネズビット自身、その後 17 世紀のイギリスという過去の世界の歴史的再構築にタイム・トラベルの要素を加えた作品として、*The House of Arden* (1908) とその続編、もしくは対の作品にあたる *Harding's Luck* (1909) を発表している。この伝統の直系に当たるのがアリスン・アトリーの『時の旅人』である。彼女の物語ではエリザベス 1 世統治下の 16 世紀のイギリスでスコットランドの女王メアリーを助けようとするバビントン一家の企てに 20 世紀の少女が巻き込まれる。それに対して、ヒルダ・ルイスの『とぶ船』は同時代の空間移動と過去への時間移動の両方を扱っている。アーデン系列の直系というよりも、『砂の妖精』シリーズの第二作目、三作目の系列に属すが、ネズビットの作品に特徴的なコメディの要素はかなり抑えられており、マチルダやウスレトセン王子が登場する章ではむしろ『時の旅人』の醸し出す、しみじみとした雰囲気を感じさせる作品となっている。確かにアーデンの直系に当たる作品群と比較すると、『とぶ船』では主人公の子どもたちが過去の全く同じ時代の同じ場所へ何度も旅をして戻るわけではないので、歴史的再構築という面でやや深みに欠けるところがあるのは否めないが、ひとつの物語の中で時間旅行と空間旅行という両方の冒険が楽しめる物語は他にあまり例がなく、それが『とぶ船』のユニークな特徴となっている。その後、ネズビットの *The House of Arden* の流れをくむタイム・ファンタジーの作品として、1950 年代には、まず 1952 年にメアリー・ノートンの『床下の小人たち』が出版され、続いて 1954 年にルーシー・ボストンの <グリーン・ノウ>シリーズの第一巻『グリーン・ノウの子どもたち』が登場し、更に 1958 年にはフィリパ・ピアスの『トムは真夜中の庭で』、1970 年代にはペネロピー・ライヴリーの *The House in Norham Gardens* (1974) へとその伝統は受け継がれている。

おわりに

本稿ではヒルダ・ルイスの歴史小説作家および児童文学作家としての主な作品群を概観することによって、その特徴を捉え、彼女の代表作であり、唯一のファンタジーでもある『とぶ船』についてネズビットの『魔よけ物語』との類似点を確認した。どちらもイギリス児童文学におけるタイム・ファンタジーの初期の作品であるが、井辻 (2005) はこの時代の時間旅行という観念は空間的な、いわゆる私達が旅行と呼ぶものと似通っており、『とぶ船』は『魔よけ物語』の延長線上にある「世界史観光旅行」(p.58) であると述べている。しかし、『魔よけ物語』では時間が「場所に埋め込まれたスタティックな指標」(p.58) であるのに対し、『とぶ船』では場所に「ふりつもってゆく時間の流れのダイナミズムに目が向けられている」(p.59) と指摘している。ここに歴史小説作家としてのヒルダ・ルイスの本領が発揮されているのである。今後更にこの点について、クラウチ (1972) が「ネズビットの伝統」と呼ぶものをヒルダ・ルイスがどのように受け継ぎながら、歴史小説作家としての視点を生かして独自の物語世界を構築するのに成功したかについて考えてみたい。

参考文献

- Boston, Lucy (2002). *The Children of Green Knowe*. New York: Harcourt.
- Carroll, Lewis (1998). *Alice's Adventures in Wonderland and Through the Looking-Glass*. London: Oxford University Press.
- Commire, A. (Ed) (1980). *Something About the Author 20: Facts and Pictures about Authors and Illustrators of Books for Young People*. Detroit : Gale.
- Crouch, Marcus (1972). *The Nesbit Tradition: The Children's Novel in England 1945-1970*.

London: Ernest Benn.

- Lewis, Hilda (1933). *Madam Gold*. London: Hurst and Blackett.
- Lewis, Hilda (1933). *Pegasus Yoked*. London: Hurst and Blackett.
- Lewis, Hilda (1947). *The Day is Ours*. London: Jarrolds.
- Lewis, Hilda (1952). *The Gentle Falcon*. London: Oxford University Press.
- Lewis, Hilda (1960). *Here Comes Harry*. London: Oxford University Press.
- Lewis, Hilda (1965). *Wife to Henry V*. London: Jarrolds.
- Lewis, Hilda (1968). *Harold Was My King*. London: Oxford University Press.
- Lewis, Hilda (1971). *I Am Mary Tudor*. London: Hutchinson.
- Lewis, Hilda (1973). *Mary the Queen*. London: Hutchinson.
- Lewis, Hilda (1974). *Bloody Mary*. London: Hutchinson.
- Lewis, Hilda (1998). *The Ship That Flew*. London: Oxford University Press.
- Lewis, Hilda (2006). *Harlot Queen*. Stroud: Torc.
- Lewis, Hilda (2006). *Wife to Cahrles II*. London: Hutchinson.
- Lewis, Hilda (2008). *I, Jacqueline*. Stroud: Torc.
- Lively, Penelope (1986). *The House in Norham Gardens*. London: Puffin.
- Nesbit, E. (1986). *The House of Arden*. Harmondsworth: Puffin.
- Nesbit, E. (1909). *Harding's Luck*. London: Hodder and Stoughton.
- Nesbit, E. (1971). *The Story of the Treasure Seekers*. London: Penguin Books.
- Nesbit, E. (1993). *Five Children and It*. Ware: Wordsworth Editions.
- Nesbit, E. (1993). *The Phoenix and the Carpet*. Ware: Wordsworth Editions.
- Nesbit, E. (1996). *The Story of the Amulet*. London: Penguin Books.
- Norton, Mary. (2003). *The Borrowers*. San Diego: Odyssey Harcourt.
- Pearce, Philippa (2008). *Tom's Midnight Garden*. London: Penguin Books.
- Potter, Beatrix (1989). *The Tale of Peter Rabbit*. London: Frederick Warne.
- Ransome, Arthur (1958). *Swallows and Amazons*. London: Jonathan Cape.
- Tolkien, J. R. R. (1993). *The Hobbit*. London: HarperCollins.
- Travers, P. L. (1934). *Mary Poppins*. London: Peter Davies.
- Uttley, Alison (1939). *A Traveller in Time*. London: Faber and Faber.
- Waters, F. (1999). *LEWIS, Hilda (Winifred)*. In S. Pendergast, and T. Pendergast, (Eds), *St. James Guide to Children's Writers*, 5th edn. Detroit: St. James Press / Gale.

井辻朱美 (2005).『ファンタジー万華鏡』、東京：研究社。

ヒルダ・ルイス著、石井桃子訳 (1973).『とぶ船』、東京：岩波書店。

ヒルダ・ルイス著、石井桃子訳 (2007).『とぶ船 上・下』、東京：岩波書店。

E. ネズビット著、八木田宜子訳 (1995).『魔よけ物語 上・下』東京：講談社。